1．大谷大学図書館所蔵
貝葉写本の概要と入手経路

長崎法潤

『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』が大谷大学図書館から平成7年3月に刊行された。序文、カラー図版、解説、凡例などを含め、859ページに及ぶ大きな目録である。

大谷大学所蔵貝葉写本（以下〈大谷パーリ貝葉〉）は、東南アジア諸国に伝えられていた文献であるが、その入手経路によって、(A)クメール文字写本（59套）、ビルマ文字写本（4套）、モン文字写本（1套）のグループ、(B)ラーンナー文字写本、少数のクメール文字写本のグループ、の二つに分けられて図書館書庫に保管されてきた。わが国では最もまとまったパーリ語写本のコレクションである。

(A)グループのクメール文字写本など総数64套の貝葉写本は、シャムの王室からの寄贈であると伝えられている。明治31年（1898）1月、インド・ネパール国境のピプラワーで発掘された仏舎利がイギリス政府から仏教徒のシャム王室に贈られた。シャム王室は、その一部を日本の仏教徒に贈りたいと申し出た。各宗派協議会を開いて、明治33年（1900）5月、東本願寺大谷光演新門を奉迎正使とする一行18名の奉迎団を派遣した。一行には南条文雄師も加わっている。奉迎した仏舎利は、現在、名古屋市の覚王山日泰寺に納められている。大谷大学所蔵のクメール文字などの写本は、その時シャム王室から正使に贈られたものと伝えられてきている。

ところが、仏舎利の奉迎を伝える資料（小室重弘『釈尊御遺形伝来史』、明治36年、71-74頁）にも、奉迎団員の一人であった南条文雄師の「仏骨奉迎」（『懐旧録』、1979年、258-264頁）にも、〈大谷パーリ貝葉〉については記されていない。しかし、シャム国王后陛下が、貝葉に写した『シャム文抄略三蔵経』を日本仏教徒に寄贈され、それは豪華な装飾に飾られ、チーク材の外函に納められている、と伝えている。この経巻は、王后陛下が日本仏教徒に寄贈のために、とくにジアスリンドル（勝天主）僧正をして、貝多羅葉に写出させたものであり、仏舎利奉迎より約4ヶ月後の10月30日をもって、在シャム国稲垣公使を経て、

当時の仮奉安所の京都妙法院に到着している。[1] なお、『抄略三蔵経』は七編からなり、一枠に納め、枠には真珠をちりばめたシャム製金繍の絹蓋がつき、象牙に経典名が書かれていた。[2] 明治33年7月28日発行の『宗報』(10頁)にも、釈尊御遺形奉迎を報告して、王后より三蔵聖経の写本が寄贈されたことが記されている。同じ内容の記述は南条文雄師の「仏骨奉迎」にも見られるが、そこでは王室が日本仏教徒に寄付されたことになっている。〈大谷パーリ貝葉〉には上記のような装飾は見られず、套数も全く一致していない。したがって、それは大谷大学所蔵の写本と同一の写本とは考えられない。

大谷大学のクメール文字写本がシャム国王からの寄贈であることを伝える最初の記録は、明治44年(1911)2月25日発行の『宗報』第113号「真宗大学図書館現況」においてである。そこには、シャム国先帝から当法主への貝葉蔵経60帙の寄贈を伝えるが、その年月は記されていない。[3] もちろん明治44年には仏舎利奉迎当時の王は先帝になり、新門は法主になっている。『宗報』発行の明治44年当時には南条文雄師が真宗大学の学監を務めている。

シャム国王より寄贈の大谷大学の写本と、シャム国王后陛下から日本仏教徒に寄贈された『シャム文抄略三蔵経』七編とは異なるものと考えられる。大谷光演師が仏舎利奉迎団の正使としてシャム国を訪れた時、正式には『シャム文抄略三蔵経』七編が贈られたから、小室重弘師も南条文雄師もそれを記している。したがって、〈大谷パーリ貝葉〉は、仏舎利奉迎の際にシャム国王から大谷光演師に個人的に贈与されたか、あるいはその後で贈られたかのどちらかである。したがって、『シャム文抄略三蔵経』七編は別にどこかに保管されているはずである。

平成10年12月、前田恵學博士のお力により、名古屋市の覚王山日泰寺所蔵の写本を拝見する機会を得た。「暹羅国皇后陛下御寄贈貝多羅葉御経」と書かれた木の札を見つけることができた。これは、王后陛下が日本仏教徒に寄贈した『抄略三蔵経』七編を指すようであるが、貝葉写本そのものについては特定することはできなかった。しかしながら、王后陛下御寄贈の貝葉は、仏舎利とともに日泰寺に収められたものと考えられる。

さらに、覚王山日泰寺の御本尊は、仏舎利奉迎の際、シャム国王より日本仏教徒へ寄贈された古い仏像(『釈尊御遺形伝来史』pp. 68-71)である。注2に引用した、ブハスカラヴオンゼ文部大臣の稲垣公使宛の書状のなかに、シャム王后

陛下からの『抄略三蔵経』は「国王陛下より下賜せられたる黄金仏と相対して其荘厳を添るものに有之候」と記されているところから考えれば、『抄略三蔵経』は仏像とともに日泰寺に収められたことは確かである。

以上によって、〈大谷パーリ貝葉〉は、仏舎利奉迎の際、シャム国王后より日本仏教徒に寄贈の『抄略三蔵経』とは別の貝葉である。つまり、〈大谷パーリ貝葉〉は、明治44年2月25日発行の『宗報』第113号「真宗大学図書館現況」に記すように、シャム国先帝から大谷光演法主に寄贈されたものであり、それは仏舎利奉迎とは別の時である。『宗報』第113号が図書館現状のニュースとして〈大谷パーリ貝葉〉をとりあげていることから考えれば、『宗報』第113号発行に近い時期、すなわち明治43年の後半から明治44年初めごろまでの時期に〈大谷パーリ貝葉〉が真宗大学図書館に収められたものと言うことができる。

ところで、シャム国先帝から寄贈の大谷大学所蔵の写本64套については、1葉の大きさは約53-60×5.1-5.5 cm であり、金、朱、金、または金一色等の小口塗装が施されている。塗り物の美しい挟板は11点に見られる。そのほとんどは黒漆塗地に金で花鳥の模様があり、中心に一対の動物が描かれている。1点だけが黒漆塗地に金で牡丹と石榴と思われる模様が描かれている。11点以外の挟板は、すべて普通の板である。

クメール文字写本は、クメール文字、すなわちカンボジア文字で書写されたパーリ語の仏教写本であるが、必ずしもカンボジアで書写されたとはかぎらない。それらは中部タイの仏教寺院でも用いられているからである。大谷大学のクメール文字写本のいくつかにシャム語の書き込みが見られるから、タイの寺院で使用されていたことがわかる。

クメール文字写本59套には律経論の註釈類が多く見られる。律蔵では Bhikkhunīvibhaṅga, Mahāvagga、注釈では Samantapāsādikā などが入っている。

経蔵については、長部、相応部、増支部の経典は1経も含まれていない。中部経典の一部（5品38経）が含まれている。注釈では長部註（Sumaṅgala-vilāsinī）、中部註（Papañcasūdanī）が入っている。小部経典関係では、Dhammapada の註釈（Dhammapadassa atthavaṇṇanā）、Suttanipāta の註釈（Paramatthajotikā）、Petavatthu の註釈（Paramatthadīpani）、ジャータカ註（Jātakaṭṭhakathā）の数種、ジャータカ復註 Līnatthapakāsinī, Apadāna

註などである。なかには Sisora-jātaka などのように PTS に入っていないジャータカも見られる。

その他、歴史書、文法書などの写本もあるが、本クメール写本の特徴は、論蔵の註釈書、復註書、復々註が多いことである。とくに復註書、復々註などの、まだ刊行されていない文献が多数含まれている。現在のパーリ仏教研究においては、復註書、復々註の研究はまだ未開拓の分野である。その点でも本クメール文字写本は、今後のパーリ仏教研究にとって貴重な資料を提供するものである。

(B)グループのラーンナー文字写本は、57点の大型書類封筒に無造作に入れられて書庫に置かれていた。挟板も失われ、写本の保存状態は良くなかった。写本の使用文字については不明であったので、国内のパーリ語、ビルマ語、タイ語の専門家に問い合せたが、明確な返答がえられなかった。ラーンナー文字であることが初めて明らかになったのは、昭和61年(1986)、ゲッチンゲン大学のハインツ・ブラウン博士に写本のコピーを見てもらったときである。その後、貝葉写本整理のスタッフにラーンナー文字写本の解読に取り組んでもらった。二ヵ月後、三ヵ月後に少しずつ解読作業が進み、ようやくラーンナー文字写本の整理に着手することができた。そのうち、京都大学東南アジア研究センターに、タイのチェンマイ教育大学からラーンナーに通じているアルーンルット教授が客員として来られたので、写本整理に協力してもらった。

ラーンナー文字写本は、タイ北部を中心にして、ミャンマー、ラオス北部から中国の西双版納までの広い地域に流布している。今回の写本整理で、ラーンナー文字写本の一つに、“ B. Hkum Kang. M. Chung Lawng　West Salween Apr. 10th 1907 ” という鉛筆の書き込みを見つけた。これは、この写本を入手した場所の西サルウィンとその年月日を記した書き込みに違いない。西洋の学者からも見てもらったが、その書体は、日本人のものでも、東南アジアの人のものでもなく、疑いなくイギリス人の書いたものと判明される。したがって、1902年（明治40年）４月10日にタイ・ミャンマー国境のサルウィン川の西でイギリス人によってその写本が採取されたことがわかる。推測であるが、そこを訪れた大谷本学の先輩がそれを入手して、将来したと考えられる。したがって、ラーンナー文字写本が大谷大学に納められたのは、少なくとも明治40年以後である。他の二つの写本にも同一の書体による書き込みが見られるが、その一つ

は東サルウィンのビルマ寺院からの収集であることが記されている。

写本の14点に書写された年月が書かれている。それらは1750年から1887年にわたって書写されたものである。8点の写本が1887年の書写であり、そのうちの3点には、ビルマのパガン版からの書写、と記されている。また、いくつかの写本の奥書に書写された寺院や村の名称が記されているが、今のところ確認できたのは、チェンマイ東南のプレーにある一寺院だけで、他は不明である。

大谷大学所蔵のラーンナー文字写本はすべてパーリ語とラーンナー語の混淆で書かれている。論書や註釈類が少なく、ジャータカ類が圧倒的に多く含まれている。弥勒仏に関する経典も見られる。ラーンナー仏教文化圏では、ジャータカの書写奉納とか、弥勒仏の経典に関する特別な信仰が現在も行なわれている、と報告されている（柏原信行「タイ北部のパーリ仏教―前田基金による海外調査報告―」『パーリ学仏教文化学』第8号）。

ラーンナー仏教文化については、近年フィールド・ワークによる研究がいくつかなされている。しかし、文献による研究は全く行なわれていない。大谷大学のラーンナー文字写本の整理によってえた成果は、わが国におけるラーンナー仏教研究に少なからず貢献するものと確信する。

注

1 『釈尊御遺形伝来史』（pp. 71-72）には次のように記されている。

暹国王后陛下の寄贈経巻

宮中御陪食の節、暹国国王陛下の約束し賜ひし如く、同王后陛下より寄贈の経巻は是年十月三十日を以て、在暹稲垣公使を経て、当時の仮奉安所なりし、京都妙法院に到着したりし、此経巻は王后陛下が日本仏教徒に寄贈せんが為めに、特にジアスリンドル（勝天主）僧正をして、貝多羅葉に写出せしめられたる、暹羅文の抄畧三蔵経にして、之を綴るに金絲を以てし、金絲の先端には、劒形の象牙を付し、之に題号を刻し、之を蓋ふに絹を以てす、此絹は長さ五尺幅三尺にして、金絲を以て之を刺繡し、飾るに諸種の珠玉を以てし、光彩爛燦として人目を眩せんとする貴品なり、其外函は暹国の名木なるチーク材を以て之を製作せり。

2 『釈尊御遺形伝来史』（pp. 73-74）によれば下記の通り。

公使閣下

小官ハフラ、ジアスリンドル氏をして抄畧三蔵経を貝葉に写したるもの七篇を贈呈するの栄誉を有す　右は一枠に納め枠には真珠を鏤め暹羅製金繡の絹蓋を備へ象牙製の標題を附し金絲の装飾を施せるものに有之候　是実に暹羅国王后陛下が日本仏

教団体に下賜せられたるものに有之　曩に奉迎使来朝の節　国王陛下より下賜せられたる黄金仏と相対して其荘厳を添るものに有之候

小官は茲に　王后陛下の叡旨を体し貴官が日本国に前文の趣を伝達せられんことを希望す

千九百年九月三日

盤谷に於て

文部大臣　ブハスカラヴオンゼ

稲　垣　公　使　閣　下

3 「暹羅貝葉蔵経は、暹羅先帝より当法主台下に寄贈したまひしものにして、凡て貝多羅葉より成り、全部六十帙、一帙の長一尺九寸、幅一寸八分、厚概五六寸なり。表装亦丹朱金を用い、……。」　『宗報』第113号、pp. 17-18